

12 新唐土漂流記

筆 者 横山 一

今から始まるお話は私が住んでいる沖之須の実話で 180 年ほど前にあった沖之須の本当の話です。以下はこの実話を基に「演劇用の台本」として作成したものです。掲載紙面に制限があるため、物語は途中要約してありますが皆様お楽しみください。

天保十年（1839 年）当時、遠州城東郡沖之須村の住人で仙太郎という 36 歳の沖船頭と水主で同村の 48 歳の松之助、25 歳の辰蔵の 3 人は江戸行きが決まり仙太郎の家に集合するのでした。航海の無事を祈りお宮にお参りに行くことになりました。（水主とは乗組員の事です。）

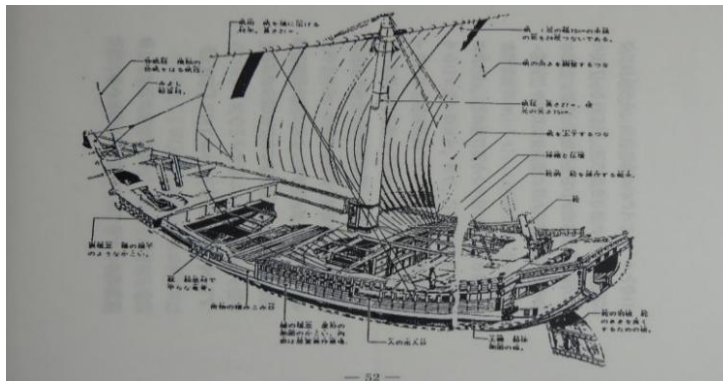
（仙太郎） 松兄い 辰蔵 江戸行きが決まったぞ!!
11 月 1 日からだ!! お前ら頼むでな!!
そうだ!! 江戸へ行く前に八幡様へお参りに行かまいか。
（松之助） そうか 決まったか!! 解った!! 頑張るよ!!
お参りは金毘羅様とお寺（暘谷寺）も行ったほうがいいら。

3 人は沖之須のすべての神様を訪ね歩き航海の無事を祈るのでした。

（仙太郎）（松之助）（辰蔵）
江戸へ荷物を届ける役目を果たし 3 人が無事帰れますように。
どうぞ、三人をお守りください。

3 人は江戸行きに期待と不安を感じながらそれぞれの思いを馳せるのでした。
そして、3 人は昇栄丸という弁財船で今の福田湊で帆をあげたのは天保 10 年（1839 年）の 11 月 1 日の事でした。

仙太郎ら 3 人は横須賀藩や浜松藩、それに周辺の旗本の領地の年貢米や炭を積み込んで江戸を目指したのでした。江戸の帰りには下田へ寄港し伊豆石を積んで帰る予定です。往復で 10 日程度の船旅です。沖之須の船頭たちは横須賀の前を流れている黒潮と西風に乗って江戸へ行く航海術を持っていました。（今の東名高速道路を走って東京へ行くようなもので潮と風の具合が良ければ 3 日で江戸に行けたそうです。）



弁財船

11月1日のこの日は帆にあたるうまい追い風がなく逆風もあって船頭の意に反して船は目的地の江戸とは逆方向の志摩の国（三重県）の鳥羽の港に吹き戻されてしまいました。

（仙太郎）　　ならい風がこんなに長く吹くとは思わなんだなあ。

全く前に進まねえ。後ずさりする一方だ。

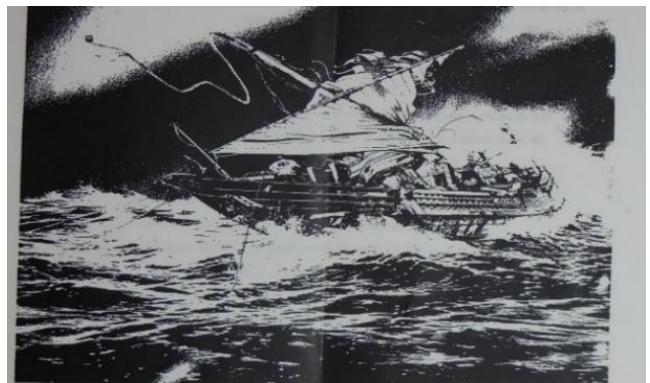
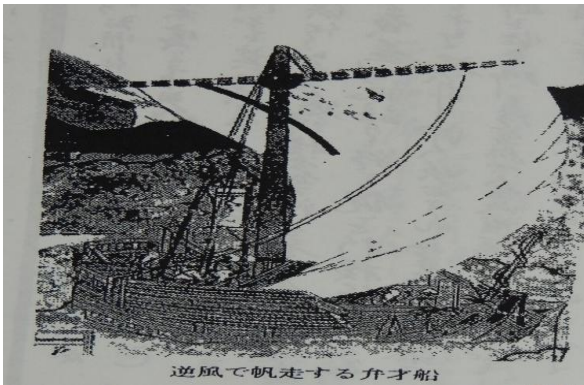
鳥羽の港で10日ほど日和待ちし、ようやく出発することができました。

船が横須賀の沖のあたりに差し掛かったその日の晩、ますます北西の風が強くなり昇栄丸は思いに反して沖へ沖へと流されてしまいました。

（仙太郎）　　だ、だ、　だめだ。北の風が強すぎて梶がきかん。

北の風があまりに強すぎる。

（松之助）　　仙太郎　朝からずうっと舵を握りっぱなしだ。このままじゃ踏ん張りもきかんだろうでこの辺で変わらっか。



逆風で帆走する昇栄丸

荒れ狂う大波にもまれる昇栄丸

流されまいと逆帆で船を操り続けたのですが無理がたたリ『船の命である梶』が折れてしまいました。梶を失っては船頭といえども船を操ることはできません。船は沖へ沖へと流されていきました。

（仙太郎）　　今　ボキって音がしたぞ。梶が折れたみたいだ。梶がきかん!!

梶がきかんぞー!!　だ!!　だめだ!!　船が流されていくー。

（松之助）　　な!!　なんだって!!　仙太郎　梶が折れたって!!

3人は暗闇の中で混乱し大きく動揺するのです。

長い夜が明けて朝もやの中で視野が開けてくるにつれて、陸地は遠ざかり、沖へ流されていることに気付きました。

もうこうなると遭難したことを認めるしかありません。

（仙太郎）　　お前ら俺らは遭難しちまった。こうなったら船を軽くして俺たち3人を時化から守らにゃいかんぞ。米俵と炭俵を海へうっちゃるぞ。

仙太郎は沖船頭の心得として『船を軽くする』ことが時化にあった時の対策と知っていたのです。

（松之助）　　仙太郎　御用米を海にうっちゃって大丈夫か？

（仙太郎）　　松兄い、船を軽くしにゃあ絶対だめだ。御用米だが仕方がない。我ら三人はこのままじゃ御用米と一緒に海の中だぞ・・・。

三人は覚悟を決め船に積んであった米俵や炭俵を海に捨て始めました。
そして三人は船のへさきに立って沖之須村の八幡様や金毘羅様にいつまでも
一心に祈るのです。

(仙太郎 松之助 辰蔵)

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏・・・。

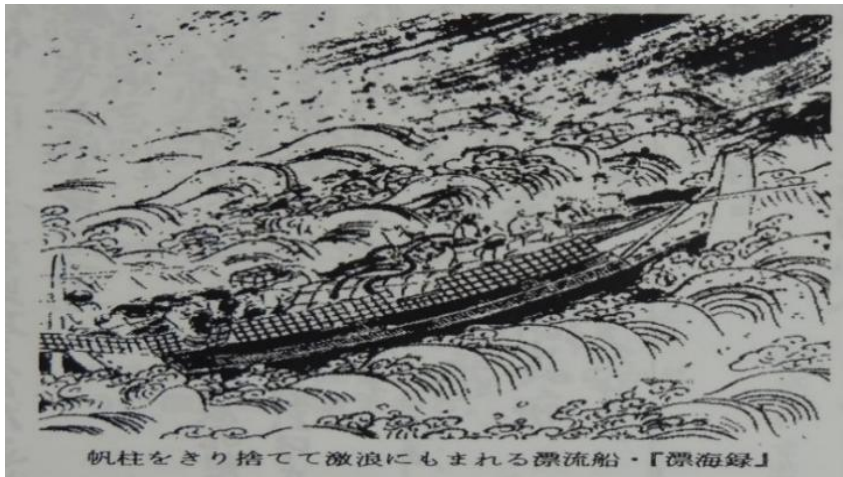
仙太郎らの祈りもむなしく、船はどんどん沖へ流されていきます。伊豆の島が見え、やがて八丈島が見えてきましたが、どうしようもありません。船は漂い続けます。こうなれば帆柱を切り捨てて船の安定を良くし転覆しない用心をするしかありません。同時にそれは漂流生活の始まりを意味するものでした。

11月14日船頭仙太郎は帆柱を切り捨てる決心をしました。

(仙太郎) 松兄い、辰蔵 帆柱を今から切るでな。船を守るにはこれしかない。

(松之助) うーん……。しょうがないだらな……。

(ガツーン ガツーン ガツーン……)



帆柱を切り捨てて激浪にもまれる昇栄丸

悲痛な思いで帆柱を切り捨ててから遠く日本を眺めると富士の山が波の間に間に将棋の駒の様にかすかに見えるのです。

話は変わりますが、昔から読み書きそろばんといいますが庶民の習い事の基本とされてきました。が得意な人はあまり多くはなかったようです。

仙太郎は当時では優秀で読み書きができました。出航日当日から航海日記を毎日つけていました。これからもつけていく訳ですがこの記録がのちの3人を大いに助けることになるのです。

もう流され始めて10日ほどになりました。

この日は西風が強く海が荒れて、そのうちに今度は東の風になり海はにわかに大波の荒れ狂う地獄の世界と化したのです。

3人はさらに荷物を投げ捨て、船脚（ふなあし）を軽くするため身体と手足の動くだけ、船先へあるいは船尻へと、右に左に投げ出しかつぎ出し互いに声を掛け合い走り回り飛び回り必死に嵐と戦いました。

(仙太郎) みんな 死ぬ気で動け!! 海へ落ちたら最後だでな!! 絶対、海へ落ちる

なよ!! いいか!! 絶対!! 海へ落ちるなよ!!

(松之助) 神様—!! 仏様—!! 地の神様—!!

そうした必死の努力の中で船の胴回りの部分が損なわれて船の垢水（あくみず）が噴出してきました。もはやこれまでと三人共に力も気力も抜け、これもかなわぬ努力とあきらめ死ぬ覚悟をしたのでした。

いざという時の為に残しておいた着物に着替え三人そろって西に向かって手を合わせるのでした。

(仙太郎 松之助 辰蔵)

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏・・・・・・・・

そしていつしか疲れ果てそのまま寝入ってしまったのです。

やがて、3人の覚悟とは裏腹に次第に海は静まっていきます。物も食わずに気力も失い3日続けて寝ているうちにだんだんと日和りもよくなってきました。不思議なものでいったん死を覚悟したものの、だんだんと生きている嬉しさがこみ上げてきてそれぞれに起き上がりおかゆを煮始め食べ始めたのです。

(仙太郎) 松兄い 辰蔵 おかゆができたぞ。おかゆができたぞ。

起きろー。起きろー。お前ら 起きろー。

(辰蔵) 仙太郎さ……。俺がやらにゃあいかんのにすまないねえ。

いい塩梅でうまいなあ……。うまいなあ……。

それもつかの間、またまた海が荒れ出したのです。波の高さは富士の山ほどに大きく、波は船に残った荷物をことごとく跳ね飛ばし、一層軽くなった空船を木の葉のように舞い散らしたのです。

(仙太郎) 地獄が又来たぞ……。わー なんじゃこのありさまは……。

(松之助) こりゃたまらん……。船がひっくり返るんじゃないか……。

所詮、自然の力にはかなわぬもので無駄骨を負ったところで仕方がない。ただただ念仏だけを唱えよう。今度ばかりは気力もうせて手に持っていたものも投げ捨ててひたすら念仏を唱えるのでした。

(仙太郎 松之助 辰蔵)

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏・・・・・・・・

またまた日和がよくなってくると寝てばかりもいられません。とうとう又起き出して垢水を汲みだしたり、船を綱で巻き付けたりして壊れかけた船の修繕を始めます。こうした内に船はますます沖へ沖へと流されていきます。

正月、二月、三月と月日は過ぎていきます。じっとしていても仕方がないので釣りでもしてみると、三尺ばかりの鰹が十四五本つれたこともありました。

4月5月6月と月日は過ぎていきました。

そして6月の波も風もない穏やかな朝、遠くの波間に小さい白い帆を広げた帆船が見えるのです。3人は千載一隅の機会と渾身の力を込めて大声をあげて手を振るのでした。すると帆船は徐々に大きくなりこちらに近づいてくるではありませんか。

3人はさらに大声をあげ手を振るのでした。帆船はさらに近づいてくるので3人は急いで

荷造りを始めました。

(仙太郎) おおいー こっちだー!! おおいー こっちだー!!

(松之助) 横須賀の昇栄丸はこっちだー!! 助けてくれー!!

やがて帆船は昇栄丸に近づき、今まで聞いたこともない大声で仙太郎達三人に話しかけてくるのです。何を言っているのか全く分かりませんでした。

帆船の乗組員は今まで見たこともない身なりをし、ホリの深い顔立ちをした大きな人たちでした。

外国船の乗組員は昇栄丸を見て、三人が航海の途中、遭難して長く漂流していることを容易に理解することができました。

そして船長と思われる人が船に乗り移るように手招きするのですでした。

仙太郎たち三人は急いで荷物を帆船に放り投げ、そして飛び移り、外国船の甲板に正座し深く頭を下げるのですでした。

(船長) Who are you ? Where do you from ?

(仙太郎) 俺たちは遠州横須賀藩の昇栄丸の三人です。嵐で梶が折れて漂流しています。どうか助けてください。

(松之助) 俺たちは半年以上海を漂っています。どうかこの船に乗せてください。お願いします。

(辰蔵) 食うものも飲むものもなく頑張ってきました。どうぞお願いですから助けてください。この船に乗せてください。

(船長) ちんぷん かんぷん ???

外国船の乗組員たちは、絶望の淵を歩いてきたであろう三人に温かいまなざしを送ってくれました。

そして、水や食料を分け与えてくれました。三人は何度も何度も頭を下げ、差し出された食べ物をむさぼるように食べるのですでした。そしてベッドを用意してくれて休むように促してくれました。

(船長) Please eat this foods and drink

(仙太郎)(松之助)(辰蔵)

ありがたい ありがたい むしゃ むしゃ。

翌日、仙太郎は漂流期間に書き残した航海日誌を船長に見せました。

(仙太郎) 大体 7 か月くらい流されているようだ・・・。

仙太郎は指を折りながら漂流の日数と月数を示します。船長も指を折りながら漂流日数と月数を数えます。

(船長) One two three four five six seven month・・・。

Oh!! I understand!!

のちに分かったことですが、この帆船はアメリカのブリック船アーガイル号という船で船長の名前はコッドマンという人でした。

三人は 救助された後、南アメリカのチリのパルパライソ、ペルーのリマを経由して再び太平洋を横断しフィリピンに立ち寄り、天保 12 年正月にマカオに着くことになりま

す。仙太郎たち三人の航海期間はおよそ8か月かかったのです。8か月の間、コッドマン船長をはじめ帆船の乗組員は漂流民三人に優しく接してくれました。彼らには三人がぼさぼさ髪（かみ）の変な髪（かみ）の結い方をした（ちょんまげ）髭（ひげ）もじゃの顔かたちの三人がきつと原人（原始人）の様に映ったことでしょう。

そして8か月後の天保12年正月、仲良くなったアーカイル号の乗組員たちとの別れの時が来ました。別れはいつの時代も同じで、共に過ごした彼らとの別れは大変つらいものでありました。

（コッドマン船長） センータロウ、 マツノスケ、 タツゾウ、
タツ シャデナ……。グッドバイ……。

（仙太郎） 船長様 あんたは我々3人の大恩人です。今回のことは一生忘れません。ありがとうございます。これからもううっと元気でいてください。大変ありがとうございます。

（辰蔵） サンキュウベリーマッコ!! サンキュウベリーマッコ!! サンキュウベリーマッコ!!……。

マカオについた3人はここで唐の役所に引き渡されることとなったのです。青石を敷き詰めた唐の役所で取り調べが始まると 唐の役人が『どこから来た漂流人か委細を早々に申し上げよ』と三人に行っている様ですが、当時の三人は何を言っているのかわかりません。

逆に三人が遠州弁で一生懸命話しても全ったく相手に伝わりません。

それならばと、江戸に行くとき、浦賀の港に入る為の証明書や横須賀港の船手形を差し出しました。

（仙太郎） これは江戸の浦賀港に入るときに証明書でこれはおらの藩のお殿様発行の通行手形だけれど。お殿様は西尾隠岐守（にしおおきのかみ）様というだけれど。

（唐の役人） 『さいびいんししゅ』 ???

ちんぷん かんぷん ???

ラーメン ギョウザ ワンタンメン ???

唐の役人にも、3人が海を荒らしまわる悪党の一団ではない様子が分かったようで、三人を隣の部屋に通してくれました。ここで夕ご飯を食べさせてくれました。漂着したところは奥門（マカオ）という港町でした。話は変わりますが皆さんはモリソン号事件をご存知でしょうか。

天保8年（1837年）アメリカ商船モリソン号は漂流した日本人7人を日本へ帰還させるため浦賀と薩摩で上陸を試みたのですが、当時江戸幕府の異国船打ち払い令により、モリソン号は砲撃に合い上陸を断念した事件です。このモリソン号には、後にマカオで保護されることになる漂流民 庄蔵、音吉ら7人が乗っており、モリソン号はこの日本人漂流民の送還と通商、布教のため来航していたことが1年後に分かり異国船打ち払い令に対する世間の批判が強まっていきました。又、モリソン号は非武装で当時のイギリスの軍艦と勘違いされていたことも分かったのです。

この行為を批判した開国論者の渡辺崋山や蘭学者の高野長英が幕府の対外政策を批判した為、投獄され処刑されるという『蛮社の獄』にのちに発展していくことになるわけです。その後幕府は270年余り続いた鎖国を断念し開国へと大きく舵を切っていくのです。仙太郎達3人がマカオについた時、モリソン号事件で帰国を断念した日本人7人がそこで生活していたのです。7人は我々3人を歓迎してくれて漂流生活の苦しみや救出されたことに共感し共に無事を喜んでくれました。7人の内、庄蔵たち4人は肥後藩（熊本県）出身で弁天丸という船で35日間漂流し運よくモリソン号に4人全員救出されたとのことでした。肥後弁のお国訛りは強烈で理解するのが大変でした。

（庄蔵） 飯はなんば食べとったんか？ 水はどぎゃんして管理しとったんか。腹が減ったろうに。喉が渴いたろうに。ぬし 家族は何人おらんか？

7人の内、音吉たち3人は尾州藩（愛知県）出身で宝順丸という船で14か月漂流し11人が病死や餓死し半死状態のところをモリソン号に救助させられたとのことでした。

（音吉） おみゃーら アメリカ船でどこへ行ってきたんか。チリとかペルーってどんな国だ？

そんな中、三人は尾州藩の音吉から大変重要なアドバイスを受けるのでした。

（音吉） われら7人はモリソン号で浦賀と薩摩から上陸しようとしたがモリソン号がアメリカ船だったもんで、江戸幕府が鎖国をしていて上陸させてくれなんだんだよ。おまけに大砲をぶっ放されて死ぬかと思ったぜ。
俺たちは日本（ひのもと）の民だぜ。ひでえ話だと思わねえか。なあ三人の衆!!

（辰蔵） 確かに。日本（ひのもと）の民に幕府が大砲をぶっ放すって解（げ）せない話だなー。

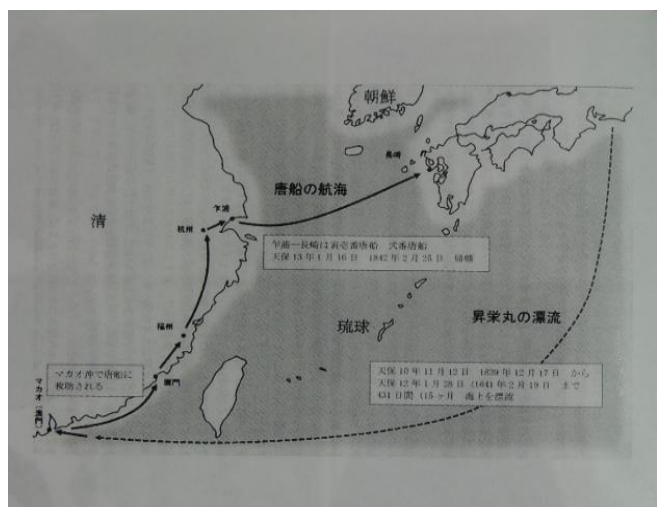
（松之助） 解った!! 音吉さ、幕府は日本（ひのもと）の民に大砲をブチかましたんじゃないくてアメリカ船に大砲を打ったんだよ。
鎖国の為、唐や朝鮮やオランダ船なら上陸させてくれたけれどアメリカ船は駄目だったんだな・・・。
なるほど・・・。アメリカ船では上陸させてくれんということなんだ・・・な。

（音吉） そう言うことだ。だから、アメリカ船に助けられたということは絶対言っちゃなんねいぞ。アメリカ船の話は絶対言っちゃなんねいぞ。

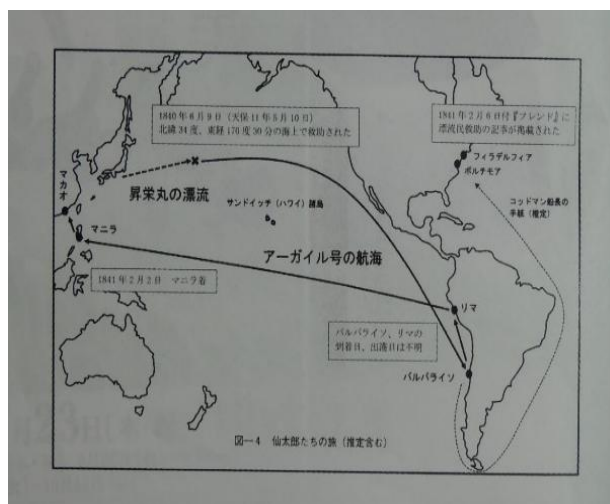
（仙太郎） 解った。俺たち三人は常に一心同体だ。俺たち三人は音吉さが忠告してくれた方向で腹を決めるつもりだよ。貴重な忠告ありがとよ。ありがとよ。

当時江戸幕府が鎖国政策をとっていたことは、仙太郎たちも承知しておりました。交易

が認められていないアメリカ船に救助されチリやペルーへ行き、フィリッピンを経由してマカオに着いたことが幕府に伝わるとモリソン号の7人の様に日本に帰れなくなるだろうということは容易に理解出来ました。3人はモリソン号の話を聞き、事の重大さに身が震えるのでした。そして絶対口にしてはならないと心に誓うのでした。仙太郎はこの後、アーガイル号に救助された日から今日までの航海日誌すべてを破り捨て、15か月漂流の後にマカオに漂着したと日記を書き換えたのでした。以後マカオに約1か月滞在し、マカオから乍保まで旅をして乍保から長崎に出港、長崎でお役人からお取り調べを受けました。そして横須賀藩のお役人に付き添われ足掛け3年振りに遠州横須賀沖之須村に無事帰還することができました。



唐土漂流船の航路



新唐土漂流記の航路

180年語り継がれてきた従来の唐土漂流船は沖之須村の仙太郎と松之助と辰蔵の三人が遠州灘沖で時化に会い、15か月漂流し唐の国マカオに着いたという話ですがこの中には二つの嘘が隠されていたのでした。その実態を日本海事史学会の小林郁先生が解明してくれました。

一つ目は時化に会い漂流して15か月ではなく7か月目に北太平洋のど真ん中でアメリカ商船のブリック船アーカイル号に救助され仙太郎達三人を乗せて南アメリカ大陸のチリやペルーを寄港してフィリッピンを経由してマカオに到着したことです。当時広東（カントン）で発行されていた「チャイニーズ・レポジトリー」には仙太郎達に関する記述があります。彼らを救助したのはアメリカ船であり漂流日数は一八一日（足かけ七か月）だったということです。

「チャイニーズ・レポジトリー」によれば、仙太郎達三人が救助されたのは天保十一年五月十日（1840年六月九日）の事でした。北太平洋上でコッドマン船長のアメリカのブリック船アーガイル号に発見されたのでした。アーガイル号はメリーランド州ボルチモアの船で広東（カントン）からチリのパルパライソへ向けて航海中でありました。コッドマン船長は六月九日の午前七時三十分難破船を発見したとあります。その船は帆柱がなく何枚かの古い小さな帆布を結んだ三本のポールを立てていたと書いてあります。船上に

は三人の人間がいて彼らはひざまずいて手を高く上げ助けを求めています。天候は穏やかな日だったので直ちに救助を開始しました。三人はすでに自分たちの船を離れる決心をしていたらしく手荷物をアーガイル号に投げ込むと自ら乗り移ってきたとあります。その船は完全な難破船で帆柱は甲板から無くなっており梶は完全に失われており船体はバラバラになるのを防ぐためロープでぐるぐる巻きに縛られていました。米とわずかな魚の切り身の他に食料はなかったとあります。そんな悲惨な状況でありましたが三人の健康状態は良好でした・・・と記述されています。

そして、仙太郎達三人を救助した後、アーガイル号はチリのパルパライソを訪れています。アーガイル号のパルパライソ入港はボルチモアの新聞「パイロット・アンド・トランスクリプト」（1840年12月2日付）でも確認できます。初めてアメリカを訪問した日本人はジョン万次郎（中浜万次郎）とされていますが万次郎の乗ったアメリカ船は1850年4月ですが仙太郎達三人は万次郎より十年早くこの国（アメリカ合衆国ではなく南アメリカのチリ）を訪れていたことになります。その後アーガイル号は最終的にペルーのリマを出帆してマニラに向かっています。1841年2月2日にフィリピンのマニラに到着、そして2月19日マカオに到着しました。この日は天保12年1月28日にあたり唐土漂流噺の15か月漂流しマカオに到着した日にあたります。

二つ目は前述したモリソン号事件です。

天保八年（1837年）アメリカの商船モリソン号は漂流した日本人7人を日本へ帰還させるため（他に商取引や布教の為に）浦賀と薩摩で上陸を試みたのですが、当時江戸幕府の異国船打ち払い令により、砲撃に合い上陸を断念した事件です。唐土漂流噺ではこのモリソン号の日本人漂流民7人の事は一切触れていないが実際は、帰国を断念した日本人7人がマカオで生活しており仙太郎達三人はそこでモリソン号事件の内情を知りアメリカ船に助けられた自分たちの帰国の難しさを知るのです。

この偶然の出会い、モリソン号の七人との出会いを証明するものが2017年11月「日本海事史学会 第74号」の「遠州船昇栄丸の唐土漂流噺をめぐって」小林郁先生記載の書籍に記されています。小林郁先生は仙太郎の子孫宅赤堀家を訪問し古文書を調査していた時に偶然一枚の紙を発見したのです。

そこに書かれている内容は下記のとおりです。

「天保十二年書之也 尾州智多郡小野浦宝順丸十右衛門船十四人乗 十一人死 残シ人三人者 宮田嶋 岩吉 三十七才 小野浦 音吉 二十六才 同 久吉 二十五才 天保三年十月十一日鳥羽出帆 十四月間流ル
肥後川尻弁天丸直乗庄蔵船四人乗 寿三郎 二十九才 熊太郎 三十二才 力松 十九才 天保六年十一月朔出帆、参拾五日流ル
遠州横須賀昇栄丸 船頭仙太郎 松之助 辰蔵」
とあります。

小林先生はここにかかれている内容を知った時の驚きを忘れることはできないと言っています。この文書は仙太郎達三人がモリソン号に乗船していた日本人漂流民七人と会って

いたことを決定づける文書だからです。赤堀家の一室で決定的な歴史的事実を大発見したことは当事者として大きな驚きできっと大興奮したことでしょう。

従来から書かれている「唐土漂流噺」にはこの記述は全くありません。当時は鎖国の時代でアメリカ船に救助された浦賀や薩摩で砲撃に合った漂流民七人とマカオで出会ったなどとは全く書けない事柄だったのでしょう。

以上、「唐土漂流噺」と「新唐土漂流記」との違いを日本海事史学会掲載の小林郁先生の「遠州線昇栄丸の唐土漂流噺をめぐって」を基にご紹介させていただきました。沖之須の3人の実体験した壮大な旅にロマンを感じていただけたら幸甚です。

令和4年12月吉日

掛川市沖之須 181

横山 一